

## 第七章 その頃東京では

与一君は行方不明、屋島君は新京に行ってしまった。お能ちゃんは瀬戸内海の小島で教師、自分だけ東京に置いてきぼりをされたようで、加奈子はイライラする日を過ごしていた。外出できるのは習い事に出かける時だけで、それもいつもお抱え運転手の君田が付き添っていた。

”会いたさ見たさに怖さを忘れ 暗い夜道をただ一人 …… あなたの呼ぶ声忘れはせぬが 出るにすられぬ籠の鳥”

大正末期から昭和の初めにかけて流行った「籠の鳥」は今で言うならデネット曲。男と妾のなさぬ仲の唄ではあるが、逢いたい相手が近くにいるだけでもまだましじゃないかと加奈子は思った。

そんなある日、父親の柳沢伯爵においしい物でも食べに行こうと誘われて一家は目白の椿山荘に出かけた。

実はこれお見合いのだまし討ちで、明治天皇のご家系であらせられる武田宮家との縁談であった。この時代なら親同士を取り決めて結婚が決まっていた時代であったが、武田宮家も事情を抱えていた。

未だに与一君のことを吹っ切れない加奈子は激怒したが、武田宮家の御子息の恒泰様も乗馬の得意なトモチヤンと言う女性に入れあげていたために縁談話など毛頭興味がなかった。そんなわけで、兎に角、相手に嫌われてやれ！とお互い腹に決め込んでいた。

恒泰様は甲高い声で余計なことをガンガンしゃべり、加奈子は一言もしゃべらず出てきた料理を片っ端から腹に詰め込む。

元より皇室の末裔と徳川重鎮の末裔、”宮家つたつて妾腹じゃねえか”犬將軍の付き人の末裔が何が貴族院だ”と常々腹の中で思っていたことが爆発。

結局、当人さしおいて御両家がいがみ合うプチ戦闘状態に陥ってしまった。

御両家がテーブルひっくり返して大乱闘している最中を抜け出した二人はラウンジでコーヒーを飲みながら話をしていた。

「だいたいさあ、家と家との結びつきだとか親の決めたなんたらとか古くねえ？」

「僕なんか規制が多すぎて息が詰まりそうなんだよね。今日だつて父親の会談のお供だつていうからついてきたんだけど、これですからね。やり方が姑息だよ。」

「ザケンジャネエヨつて言ったやりたいよねー！」

「国は戦争中、国内は共産主義者が破壊活動しているこんなご時世にのんきに結婚なんて、それこそ華族や宮家はなにやっつてんだつて庶民に見られちゃいますよ。」

「あたしもそう思う。それになんであたしたちこんな堅苦しい生活しなきゃなんねえのつて、あなた疑問に思わない？」

「庶民がさあ、僕の兵役について文句言うわけよ。」宮様達は白いお馬に乗って行進の練習していればいいんでしょうつて。冗談じゃねえよ！てめーら二年か三年行つてくりや済むんだらうが、こっちは一生てめえら庶民守るために立ち上がらなきゃなんねえんだ！背負つてるもんが違ふんだよ！。つて言つてやりたかつたですよねえ。」

「ハゲドウ！つつうつかあ、あんたら好き勝手に男だ流行りもんだって追っかけていて、こちはやりたいことも我慢して親の政略のために結婚させられる。あたしら家畜かよ！」

ボロボロになつて部屋から出てきた御両家の両親たちとは裏腹に加奈子と恒泰様は

「お互い頑張りましょう！」

「検討をお祈りします！」

と、エールを送り合つて椿山荘から追い出された。こうして加奈子最初の見合いは不調に終わった。

そんな中、柳沢伯爵邸に出入りしている商人から、加奈子は与一君らしき仕立て屋が上海にいる情報を耳にした。

### ～陸地測量部～

陸軍参謀本部の外局、陸地測量部。戦後、国土地理院と呼ばれるようになる。

軍事戦略上もとても重要で、反面、最も大衆に浸透しているのが地図である。歴史の現在が地理と言つても過言ではない。

今でこそ衛星写真で地球の外から丸見えて、グーグルマップで誰でも見られる地図であるが、国家機密をもはらむ重要な軍事パーツのため、必ずしも全貌が開示されているわけではない。

地理オタの安徳君はそんな難しいことは全然考えず、大好きな地図作りを楽しみたくて陸地測量部に入ってしまった。興味のあることには没頭するので独学で学んだ測量、製図で卓越した手腕を発揮していた。

航空機を使った測量。航空写真撮影の技術打ち合わせのために中島飛行機株式会社の三鷹研究所に安徳君は出向いていた。広大な満州の地理地形を把握するために航空機による測量を参謀本部は目論んでおり、測量に適した機種改造などを中島飛行機と共同で開発していた。

三鷹研究所跡地は現在国際基督教大学のキャンパスになっている。

研究所では機体設計の専門家のフルカワ先生が自ら設計した機体の改造に没頭していた。フルカワ先生は空気力学を徹底的に追求し、細かな凹凸さえなくした芸術的な曲線美を誇る航空機の機体を生み出していた。陸軍一式戦闘機。いわゆるハヤブサである。

海軍の艦上戦闘機「ゼロ戦」を設計した堀越博士は後にジブリアニメ、「風立ちぬ」などでその名を残しているが、ハヤブサやシブプウを設計したフルカワ博士は、戦後GHQに航空機に関わることを一切禁止され歴史の闇に埋もれることになる。

東京裁判においておきて破りの事後法により六十人の死刑囚を出すことになった戦争であつたが、陸軍からは多数の死刑囚を出していても、海軍は一人の死刑囚も出してない。ハヤブサとゼロ戦の設計者の明暗も陸軍か海軍かの違いもあつたのだろうか。

後にフルカワ博士の弟子たちは、木星に見つけた新しい衛星に「フルカワ」の名を付け、その衛星に行つて地球に戻ってきた人工衛星に「ハヤブサ」と名付けている。

安德君はこの栄光なき天才と共に測量に適した機体の改造を話し合っていた。

「満州は広大な国土のわりに離着陸できる空港が少ないので、航続距離の長さが必要で  
す。」

「燃料タンクの増量とエンジンの見直しで何とか対応できるでしょう。」

「満州国の制空権はほぼ我が国の関東軍が握っていますが、制空権を押さえた満蒙国境  
はまだしも、ソ満国境は距離も長く、いつソビエトの飛行機が飛んでくるとも限らぬため速  
度も要求されます。」

「マン毛国境に粗マン国境ですか。悩ましいですなあ。」

「先生のご想像なさっている事とは若干違うと思いますが、悩ましいです。」

もつと悩んで頭を抱えている博士がいた。エンジンの専門家の千葉の宵宵先生であった。

列強に石油の輸入を押さえられ、資源の少ない日本で製造できるアルコールや松根油を  
燃料として使えるエンジンの設計に苦労していた。

松根油とは松の切り株を茹でて水面に浮かび上がった油を生成して燃料にしたもので、山  
間地では松の大量伐採が行われた。元々はドイツが作っているらしいと言う噂が先行して日  
本も着手したが、航空機燃料としての実用化はできなかった。

アルコール燃料とは主にサツマイモを原料としたイモ焼酎の延長線上に立脚した燃料で、  
日本中の畑や空き地、学校の校庭まで芋畑になったのはアルコール燃料製造の国策だった。

ドイツでは噴射式のジェットエンジンを作ると言う噂も入ってきて、宵宵先生は焦りを感じ  
ていた。

燃料のイモ焼酎を飲みながら愛犬のヨシヨシちゃんと研究所の片隅に座り込んでいる宵宵  
先生だった。

宵宵先生を慰めようとしてヨシヨシちゃんは尻尾を振って抱きついて顔をなめた。そのとき、  
宵宵先生はその尻尾を見てあることをひらめいた。

尻尾に揚力を持たせるプロペラを付けたらどうなるだろう？滑走路がなくても浮上でき  
る。

尻尾を回しながらお尻を浮かせて空を飛ぶヨシヨシちゃんの姿が思い浮かんだ。もつと長い  
尻尾が必要だ！ネコだ！ネコなら飛べるかもしれない！

宵宵先生がネコを探していると、燃料効率の向上について相談にフルカワ先生と安德君が  
やってきた。

宵宵先生は興奮しながら今しがた思いついた案件を話した。

「それは興味深い発案ですね。回転による軸トルクをどう打ち消すか？考えてみましょ  
う。」

とフルカワ先生はトルク・テール・ローターの図面を描き始めた。安德君は

「先ほど見かけたネコを連れてきます！」と外に飛び出していった。しかし、安德君が連れ  
てきた猫は尻尾のない三毛猫だった。

ヘリコプターは古くはレオナルド・ダ・ヴィンチもその原型を考案していたが、米国がR 4 型  
を飛ばすのは昭和二十年五月であった。

第二次大戦の時にヘリコプターは使用されていないが、後に韓国人売春婦が「日本軍のへ

リコプターに乗せられて連れていかれた」と証言しているので、この二人の技術者により、世界初のヘリコプター飛行が密かに実用化されていたのかもしれない。

二人は格納庫の片隅で焼き芋を肴に航空燃料を飲みながら、垂直離陸するこの機体をどう推進させるかなど語り合った。

格納庫に一匹のブタが入り込んだ。研究所の片隅で食用に飼われていたブタで、アルコールを絞ったサツマイモのカスを餌にしていたからよく太っていた。イベリコブタのロツソと呼ばれていた。

「飛べないブタはただの豚さ。」

宵宵先生はそんなことをつぶやきながらイベリコブタのロツソを格納庫の外に追い出した。

時折、研究所の豚小屋に忍び込んでいたブタの餌にするサツマイモのカスをあさっていたカストリ作家の宮寄駿は後にこのブタをモデルに「紅のブタを」生み出す。

安徳君は垂直離着陸できる航空機についてメモに書き込んでいたが、航空燃料しこたま飲んで意識がもうろうとしてきた。

格納庫に紛れたイベリコブタを書き込むとき、目はかすみ手は震えるほど酔っ払っていたので文字がヨレヨレになって「ヘリコプタ」になってしまった。これがヘリコプターの語源となった。

~~~~~そして加奈子は~~~~~

柳沢邸で籠の鳥となっていた加奈子は何とか口実を付けて外に出るチャンスをつうかがっていた。

花嫁修業でやらされていたお花もお茶の師匠も柳沢邸に出向いてくれるので外に出る口実にはならない。日舞の稽古の時だけが唯一外に出る機会であったが荷物があるために運転手の君田がついてくる。

その日舞の稽古の帰りだった。木製の扉に貼られた一枚のポスターが目に入り、見覚えのある絵柄に車を停めさせた。

”満州から凱旋、松山座！東京公演！そして上海へ”

松山座は大阪を中心に活動しているが、慰問団公演として出向いた満州での成功で、東京でもっと興行を望む声が高まっていた。支那遠征の合間に両国の国技館が使えたので、ウドー音学事務所の協力もあり、東京公演を急ぎよ追加決定したのだ。

「なんですか？歌舞伎の公演ですか？」

車から降りてポスターをはがして持ってきた加奈子に、運転手の君田はバックミラーを見ながら言った。

「さあ、何なんでしょうね。」

と、とぼけながら、”満州”の文字と”そして上海”が加奈子を行動に移させた。松山座公演の日程を見ると、父の柳沢伯爵が貴族院の議会と重なるではないか。この日なら運転手の君田も国会に行っているはず。

”それにしてもこのポスターの絵、どこかで見たことがある。”それもそのはず親友のお能ちゃんのお母さんが描いているのだから。

その日に備えて密かに準備を進めていた加奈子は

「ちよつと歌舞伎座まで歌舞伎を観に行つてきまあ〜す！」  
と、人力車を呼んで、銀座ではなく両国の国技館へと向かった。

リングと呼ばれる舞台を見るのは初めてだった。拳闘では四本のロープが張られているが、松山座の舞台は二本のロープだった。

日独交流のために異人さんも加わっていた。カール・クラウザーと言うドイツ系の青年だった。

カール・クラウザーはスバル選手のお稲荷スープレクスに敗れたが、ヨーロッパに帰国後、お稲荷さんがはみ出さないように技に改良を加えジャーマン・スープレクスホールドを完成させ、後にプロレスの神様カール・ゴツチと名乗るのであった。

お稲荷さんスープレクスがさく裂した時、歓声とともに立ち上がって拍手をする女性が隣にいた。宝塚歌劇団で演出脚本を手掛けている菊宗政監督であった。

後に温泉地主から百姓たちが温泉の湯元を勝ち取る「辺留祭 湯の原(べるさい ゆのばら)」を大ヒットさせ、宝塚歌劇団を全国的に広めることになる人物であった。

「あんたあ。なにしとおねん。早よ立って拍手せんかい！」

菊宗政監督に促されて加奈子も立ち上がって拍手を送った。

「花があるでえ。立派なお稲荷はんや！うち(宝塚)ではできない芸や！ええ勉強になった。」

菊宗政監督は絶賛した。

「ちよつとあんたあ。あんた相撲取りか？」

菊宗政監督は関西人なので、遠慮なく聞きにくいことを聞いてくる。

「あたしは、そのお。」

「あんた花があるでえ。プロレスやらへんか？ええ体格や。」

「私ですか？」

「やるんやったら勘ちゃんに紹介したるでえ。」

加奈子は千載一遇のチャンスだと思つた。

「上海に、上海に行けるでしょうか？」

「上海どころか、ニューギニアでもフィリピンでもどこでも行けるで！」

「お願いします！私、上海に行きたいんです。行かなければならないんです。」

興行終了後、加奈子は菊宗政監督に連れられて松山座の楽屋にいた。菊宗政監督が松山勘十郎座長に加奈子とのことを紹介した。

「そういうがー(そうですか)。宝塚の監督さんが花がある言わはるんやったら、しかもか(とっても)いい素材かも知んねえだんが。ところで、おまいさん。格闘技の経験はおますか？」

松山勘十郎座長は新潟出身の大阪人なので微妙に方言がミックスしていた。

加奈子は幼少の頃を思い出した。

加奈子に習い事をさせたがついていた柳沢伯爵は、国会からの帰路にひとつの看板が目に入った。

「生田流おこと教室。」

「そうだ！加奈子ちゃんにお琴習わせちゃおう！」

柳沢伯爵は家に戻るなり女中に加奈子とその教室に通わせるよう命じた。

「おとこ教室」ではなく男気を学ぶ「おとこ教室」だった。

柔術家生田玄洋斎は突然の伯爵令嬢の入門に驚いたが、銭が入って嬉しいもんだから入門を許可した。加奈子もお花やお茶より性分に合っていたのか免許皆伝し、講道館柔道や合気道まで積極的に学んでいた。

「多少の心得はございますが、嫁入り修行で武術を学んだ程度です。フルコンタクトですか？オープンフィンガーグローブ着用ですか？」

「興行の数が多いから、そんなやれもか（無茶な）試合しちや体がもたねえつべよ。」

松山勘十郎座長は大まかに絵を描いて

「こんな感じでどんなだ？おまいさんなまらいい体格してるだんがん、コングってリングネームでどないや？」

「リングネーム？」

「しこ名みたいなもんや。そや、アジアのコングでアジアコングでどうや！」

こうして柳沢加奈子は松山座一座に加わりアジアコングとして支那を目指すのであった。夜も更けて、松山座は本拠地の大阪に向かうことになり、東京発の夜行列車に乗るために国技館から一行を乗せたバスが出た。その末席にアジアコングとして一座の団員になった加奈子が座っていた。

バスが両国橋を渡る頃、バスを追いかけて走る青年がいた。やがて青年はバスを追い越し走り去っていった。松山座の興行を見に来た秋田のネロさんだった。